

# 語り合う文学教育の会

2012年度 No.2 5月17日・文責 橋本博孝

## みなさんからのおたより

### ☆浜本純逸さん（鳥取）☆

『語り合う文学教育』創刊10周年記念号のご惠贈、ありがとうございました。このようにして実践交流の場が広がることは素晴らしいことです。ご発展を祈ります。

### ☆青木照明さん（神奈川）☆

すばらしい記念号で、その中にじっくり浸ってお一人お一人の論考と向き合っています。

池田さんの「藁」の中にある藤原先生の「自然に合わせます。そうすると神様が出てきます。」のお言葉を聞いて、すべてが分かったような晴れ晴れとした気持ちになりました。冒頭文の「雪がしんしんとふっています。」が、今までどうしても分からなかったからでした。

松本さんの、「どう思う？」から始めることを強く望みます、と言われていることに大賛成です。会員全員が「どう思う？」を実践して、「四つの実践」を追い越すつもりでやっついこうではありませんか。ただ、この時、主観主義にだけはなってはならないと思っています。

守田先生の「説明文の読みの生産性」には、大変心強く思いました。全国の先生方がこのような説明文の指導をされるようにと願っています。

田中先生のご論考、具体的でよく分かりました。「伝わるのが大事なのです。それが愛だと私は思います。」のお言葉、感銘深く伝わってきました。

最後に一つだけ。実践記録の話し合いの中から「T」の文字が殆ど消えるようになることを願っています。

☆吉田裕久さん（広島）☆

花開く好季節を迎えました。

このたびは『語り合う文学教育』第10号をご恵贈賜り、ありがとうございます。創刊10周年とのこと、おめでとうございます。文学教育への継続的なお仕事に敬服しています。藤原先生のご理論を中心に、同人の精力的な取り組み、本当に学ぶことの多い書物です。

例会では、テープ起こしによる実践報告がなされるとのこと、子どもの受け止めに大事にする、そのあらわれと改めて感心しています。これからのますますのご発展を祈念しています。

☆馬場重行さん（山形）☆

前略。

この度は『語り合う文学教育』創刊十周年記念号をご恵投下さいまして、まことに有難うございます。貴会の確かな歩みがしっかりと反映した誌面となっており、感服しております。会の益々のご発展を祈り上げます。今後どうぞ宜しくお願いします。まずはお礼迄。

☆西岡千種さん（奈良）☆

今テレビで、なでしこジャパンがブラジルを相手にすばらしいプレーをしています。この伸び伸びとしたプレー、何というパワー、コンビネーション、何よりも一人一人の技のすばらしさ。

その大音響の中で、わたしは佐藤学先生の本に線を引き付箋をつけて読み深めています。二、三日後に開かれる研修で、本年度の研究テーマをより具体化するために、何をどう指導することがテーマに近づくことか、皆に話をするために、誰かに助けてもらおうと手にした本なのです。

佐藤先生とは、熊野市の木本中学で出会いました。すばらしい授業（授業をしたのは木本中の先生。彼らはここ数年、佐藤先生の指導を受けながら学びの共同体を体験している先生達です）と、その後の講演。私ほうなりました。そして、私もこうありたいと新任の教師のような欲を感じました。〈聴く〉〈つなぐ〉〈もどす〉。子どものつぶやきを聞く。教師の「居方」。次々と言葉が出、それらがピッタリ納まる。まだまだ読み込ん

でないけれど、ワクワクしながらこの本に向かっていきます。

機関誌の感想でなくて、ごめんなさい。でも、普段、語り合う会でしている私たちの授業と、大切にしているところが似ていると思うのです。もう少し勉強していきます。

会員のみなさん、10号の感想や近況をお知らせください。この会報がみなさんの交流の場になることを願っています。おたよりは、はがき・手紙・メールなど何でもかまいません。

初めて教員になった先生、新しい学校にかわられた先生、新しいクラス、新しい子どもたち、職場の仲間、保護者達。いろんな出来事があることでしょう。どうぞ、例会に来て話してください。お待ちしております。

## 4月三重例会は、大盛況！

4月7日に三重大学国語科ゼミ室でおこないました。24名の参加がありました。藤原先生の「文学のことば—描写の読み方—」の講座でした。要約して紹介します。

物語の読みの授業に蔓延している問いかけとしては、

「どんな様子が分かりますか」

「どういう気持ち分かりますか」

「どこに書いてありますか」

が代表的なものです。

これらはいずれも、物語の文章を分析的に読めば答えが出るという前提を持っています。「どこに書いてあるか？」という聞き方自体にそのことが表れています。

とりわけ「どういう気持ち分かりますか」は、いわゆる登場人物の心情を問うものです。これまでもいろんな立場から批判がありましたが、一向に無くなりません。まだまだ大手を振って、物語の授業を歩き回っています。

「ちいちゃんのかげおくり」の次の場面を例に考えてみましょう。

朝になりました。町の様子は、すっかりかわっています。あちこち、けむりがのこっています。どこがうちなのかー。

「ちいちゃんじゃないの。」

という声。ふり向くと、はす向かいのうちのおばさんが立っています。

「お母ちゃんは。お兄ちゃんは。」

と、おばさんがたずねました。ちいちゃんは、なくのをやっところえて言いました。

「おうちのどこ。」

「そう、おうちにもどっているのね。おばちゃん、今から帰るところよ。いっしょに行きましょうか。」

おばさんは、ちいちゃんの手をつないでくれました。二人は歩きだしました。

家は、やけ落ちてなくなっていました。

「ここがお兄ちゃんとあたしの部屋。」

ちいちゃんがしゃがんでいると、おばさんがやって来て言いました。

「お母さんたち、ここに帰ってくるの。」

ちいちゃんは、深くうなずきました。

「じゃあ、だいじょうぶね。あのね、おばちゃんは、今から、おばちゃんのお父さんのうちに行くからね。」

ちいちゃんは、また深くうなずきました。

その夜、ちいちゃんは、ざつのうの中に入れてあるほしいいを、少し食べました。そして、こわれかかった暗いぼうくうごうの中で、ねむりました。

「お母ちゃんとお兄ちゃんは、きっと帰ってくるよ。」

くもった朝が来て、昼がすぎ、また、暗い夜が来ました。ちいちゃんは、ざつのうの中のほしいいを、また少しかじりました。そして、こわれかかったぼうくうごうの中でねむりました。

ここで、「壊れかかった防空壕の中で、ひとりぼっちで過ごしたちいちゃんの気持ちを考え、話し合いましょう」という課題がよく出されます。子どもたちは、こんな風に答えます。というより、こう答えるしかないでしょう。

お母ちゃんたちはきっと帰ってくる → きっと会えると信じている → おなか  
がすいた → でも、心配だからおなかに入っていない。残しておこう → 寂しい  
→ だんだん不安になってきた → でも、きっと帰ってくる → 不安だが、信じて  
いる → さらに不安がつくる

間違っているかどうかではなく、このような心理分析をやってもこの時のちいちゃん  
の姿がまるで浮かんでこないことが問題です。それは、ここの描写、どう描かれている  
かに子どもたちの目を向けさせていないところから来ています。

まず、描写を読むこと。そうすると、ちいちゃんのこのときの姿がうかんできます。  
ちいちゃんはどのように描かれているのでしょうか。

ちいちゃんがしゃがんでいるのは、我が家の焼け跡です。そこまではおばさんに手を  
つないでもらって歩いてきました。しかし、焼け跡ではしゃがみこんで、おばさんが違  
う所に行くと言っても、うなずくばかりで動こうとしません。しゃがんだままの姿勢で、  
おばさんの言葉に深くうなずき、また、深くうなずくのです。そのように描かれていま  
す。

おそらく、ちいちゃんとお母さんの間には（もちろんお兄ちゃんとも）、何かがあっ  
て離ればなれになってしまっても必ずここに帰ってきてお互いを待っていよう、という  
約束、家族の取り決めがあったのでしょう。幼いちいちゃんはその言いつけを一途に守  
ろうとしているのです。心情を言うなら、それはお母さんへの絶対的な信頼から来るも  
のでしょう。

そうすると、お腹がすいているはずなのに「ぎつの中に入れてあるほしいいをす  
こしたべました」という行動も、おそらくはお母さんの言いつけによるものだろうとい  
うことが感じられます。いっぺんにみんな食べちゃだめよ、というお母さんの声がよみ  
がえっていたのでしょう。

焼け落ちてしまった家の前でしゃがみ込んで、必死になってお母さんの言いつけを守  
ろうとしている幼いちいちゃんの姿を読むということは、この場の状況を明らかにする  
こととなります。気持ちだけを追いかけていたのでは、できません。

もう一つ、心情ばかりに目が向いてしまうと、この物語で大切な「空」が見えません。

ちいちゃんにとって空はどんなものだったか。

いろんなかげを送る楽しい空、空襲の始まる怖い空、ここでは「くもった朝がきて、昼がすぎ、また、暗い夜がきました」と描かれています。「青い空」どころか「空」そのものも直接には出てきません。

そして、まぶしい朝が訪れた時、ちいちゃんはすべてを送り込んだ空に、自分自身を送るのです。そういう物語のしくみも見えてきません。

「この表現から何が分かるか」という呼びかけは、はじめに言った「どんな様子が分かりますか」と似ていますが、教員が、出来事を順番に言わせただけなのか、その場面の状況を明らかにしたいのかで意味が違ってきます。さらに「ここをどう思うか」という問いと合わせると、実際の授業ではずいぶん違うものとなるでしょう。

描写を読むということを、もう少し具体的に言うと、例えば次の「モチモチの木」。

豆太は、真夜中に、ひょっと目をさました。頭の上で、くまのうなり声が聞こえたからだ。

「じさまあっ。」

むちゅうでじさまにしがみつこうとしたが、じさまはいない。

「ま、豆太、心配すんな。じさまは、じさまは、ちょっとはらがいてえだけだ。」

まくら元で、くまみたいに体を丸めてうなっていたのは、じさまだった。

「じさまっ。」

こわくて、びっくらしして、豆太はじさまにとびついた。けれども、じさまは、ころりとたたみに転げると、歯を食いしばって、ますますすごくなるだけだった。

「医者さまをよばなくっちゃ。」

豆太は、小犬みたいに体を丸めて、表戸を体でふっとばしてはしりだした。

ここで豆太が「じさまあっ」と言い、次に「じさまっ」と言っています。そのように描写されています。この順番が逆だったらどうでしょうか。熊のうなり声が聞こえて「じさまっ」と言い、それがじさまのうめき声だとわかって「じさまあっ」と言ったとなると、この場面の状況だけでなく、豆太像がすっかり変わってしまうでしょう。

このように描写に目を向ける、描写を読むことは基本中の基本です。

次はその読み方です。分かるか、だけでなく、感じる読みを大事にしなければなりません。五感で読むということです。

おどろはなし、木のかげもなし、ふきっさらしの野っ原なもんで、じぞうさまはかたがわだけ雪にうもれているのでした。

「おお、お気のどくにな。さぞつめたかろうのう。」

「かさこじぞう」です。じさまは地蔵さまを見て「冷たかろうのう」と言っています。そして、

じいさまは、じぞうさまのおつむの雪をかきおとしました。

「こっちのじぞうさまは、ほおべたにしみをこさえて。それから、こっちのじぞうさまはどうじゃ。はなからつららを下げてござらっしゃる。」

じいさまはぬれてつめたいじぞうさまのかたやらせなやらをなでました。

実際に石の地蔵さまのおつむやお顔にさわって、ゆきやつららをかき落とします。じさまの手に、冷たさがじかに伝わります。だからここでは「ぬれて冷たいかたやせな」とはっきり描写されています。この冷たさをじさまとともに読み手も感じることで、次のじさまのことばが納得されるのです。

「そうじゃ。このかさこをかぶってください。」

「川とノリオ」は、ノリオの感覚をとおして物語が展開していきます。はじめの所です。

あったかい母ちゃんのはんてんの中で、ノリオは川のにおいをかいだ。

母ちゃんの手がせっせとうごくたびに、はんてんのえりもともせわしくゆれて、ほっぺたの上のなみだのあとに、川風がすうすうとつめたかった。

川っぶちのわかいヤナギには、銀いろの芽がもう大きかった。

赤んぼのノリオのよごれものをあらう、あったかいかあちゃんのせなかの中で、ノリオは川のにおいをかいだ。土くさい、春のにおいをかいだ。

ノリオが外の世界に、皮膚の感覚（暖かさと冷たさ）と嗅覚で向き合っているのが分かるでしょう。

できごとや様子が「分かる」だけでなく、五感で感じる読みに子どもたちを向かわせましょう。

描写を読む時に、意識的に目を向けなければならないものの一つが、比喩です。

「スイミー」では、まぐろが「ミサイルみたいにつっこんできた」と表現されています。海の中の世界を体験していくところでは「にじ色のゼリーのようなくらげ」「水中ブルドーザーみたいないせえび」など楽しい比喩が満載です。この比喩からどんな感じを受けるか、ていねいに語り合いたいものです。

「やまなし」では、日の光は黄金となって「夢のように水の中に降ってきました」とあります。カワセミは「青光りのまるでぎらぎらする鉄砲玉のようなものが、いきなり飛びこんできました」と表現されています。そのほかにもたくさんありますが、これらの比喩を、実際の様子がどうだこうだという授業にしてしまうと、せっかくの比喩が生きません。比喩そのものの表現をもっと感じとっていくことが大切です。

目を向けるべきもう一つは、オノマトペです。

オノマトペとなれば、宮澤賢治です。「やまなし」には大変魅力的なオノマトペが次々にでてきます。はじめの「クラムボンのかぷかぷ笑ったよ」一つとっても惹きこまれません。「かぷかぷ笑う」を子どもたちはどう感じるでしょう。

松谷みよ子も劣らないオノマトペの使い手です。「茂吉の猫」では、「あたりはつぶつぶと暗くなってきました」という表現があります。「つぶつぶ」と暗くなる、これだけで不気味な感じが伝わってきます。

またこの作品では、茂吉の行動には「ぺらぺら・どきん・そろりそろり・ずうん・じっと」といった比較的ふつうのオノマトペが、猫には「ちょこん・ぼんがぼんが・ぴくん」というやや不思議なものが混じっているオノマトペが使われています。ところが化



け物どもには「ぼうっ・ぺかぺか・ずうっ・ひよろん・ぺたぺた・たあらんたあらん・ぞわっ・ぎなぎな・ざわっ・ごおっ」です。音声化してみただけで不気味な感じがします。

実は、子どもたちには、こういう比喻やオノマトペから直感的に感じるものがあるのです。授業場面は違いますが、原田さんの昨年度の「いちねんせいのうた」の語り合いから、子どもの発言を拾ってみます。

「風わあ、たぶんしゃべつとんのやと思う。」

「え、どんなこと。」

「みんなで応援しとるときわあ、頑張れとか言って。しゃべりながら見守つとるんやと思う。」

「シュー。」

「太陽としゃべつとるんと違うの。」

「(今) 何かしゃべつとるよ。」

「聞こえる人いる？ 風の声。」

「聞こえる。」

「音じゃなくて、声の聞こえる人いる？」

「まねしとる。」

「まねしとる？ どんなこと？」

「おんなじこと。」

この子どもたちは、実際に太陽と風の対話が聞こえるのでしょうか。小さい子どもたちにしか聞こえないものかも知れません。

「風の又三郎」には、そのことが描かれています。不思議な転校生が来ます。

さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪袴をはいた二人の一年生がどてをまわって運動場には行って来て、まだほかに誰も来ていないのを見て、「ほう、おら一等だぞ。一等だぞ。」とかわるがわる叫び

ながら大悦びで門をはいって来たのですが、ちょっと教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合わせてぶるぶるふるえました。がひとはとうとう泣き出してしまいました。

不思議な転校生を窓越しに見ただけで、その異様な雰囲気には震え泣いてしまう感性が一年生にはあります。

ところが、六年生にもなると…

すると六年生の一郎が来ました。一郎はまるでおとなのようにゆっくり大股にやっできて、みんなを見て「何した」とききました。みんなははじめてがやがや声をたててその教室の中の変な子を指しました。一郎はしばらくそっちを見ていましたがやがて鞆をしっかりとかかえてさっさと窓の下へ行きました。

落ち着き払っていますね。転校生だと分かってしまうからです。

中学年の嘉助は、その両方に通じる段階なのでしょう。

そのとき風がどうと吹いて来て教室のガラス戸はみんながたがた鳴り、学校のうしろの山の萱や栗の木はみんな変に青じろくなってゆれ、教室のなかのこどもは何だかにやっとならってすこしうごいたようでした。すると嘉助がすぐに叫びました。「ああわかったあいつは風の又三郎だぞ。」

自分なりの世界を作って納得しているようです。

わたしたちが、子どもたちももちろんですが、物語を読むときには、この一郎のように理屈で切り分けてしまわないようにしたいものです。

それは、ことばの背後に何らかの実体を想定して、それで解釈を決定づけようとする姿勢につながります。先の「やまなし」でいうと、クランボンとは何か、アメンボだとか水の泡だとかわたしたちの知っている実際の事物に当てはめようとする事です。クランボンはクランボン、他の何物でもなく、この物語に描かれているとおりの存在なのです。

別の例を挙げます。「ちいちゃんのかげおくり」でも「川とノリオ」でも、物語の授業なのか、「戦争中の暮らし」という社会科の授業なのか、わからないような実践に出会います。しかし、極端に言えば、「ちいちゃんのかげおくり」の背景になっている戦争には、原爆投下はありません。「川とノリオ」の戦争とは別の戦争です。いずれもアジア太平洋戦争を参照して解釈するものではありません。

身近な例で言えば、二年生の「ふきのとう」で、この季節は、春なのか、まだ冬なのか、夜が明けてからどのくらいたった時かと、わたしたちの実際の季節や生活時間に置き換えるのをやめて、描かれているとおりの世界を感じ取ろうということです。この舞台は、

竹やぶの竹のはっぱが、

「さむかったね。」

「うん、さむかったね。」

と、ささやいています。

雪がまだすこしのこって、あたりはしんとしています。

という時空間なのです。それで充分です。

要するに、「何が、どこに書いてあるか」を読むのではなく、「どのように描かれているか」を読むことが大事なのです。

不十分な要約になりましたが、物語の授業の本質を確かめさせられるお話でした。

藤原先生は奈良でも同じ講座を持ってくださいました。奈良では10名の参加がありました。

※機関誌10号は届いたでしょうか。今年度会費を納めてくださった方には郵送しました。執筆者には3部お送りしました。もしまだ届いていないという方があればお知らせください。

日文協の夏期研究集会を語り合う会も加わって、8月11日と12日に三重大学でします。予定しておいてください。西岡さんのハガキにあった佐藤学さんが来られます。佐藤さんは、最後のシンポジウムに参加します。

この内容が、だいたい固まりました。

☆第1日（8月11日）開会は13時です。記念講演と基調報告があります。

15時からの小学校分科会は、パネル討論の形で行います。

藤原和好さんの「教室で文学を生み出すための原則と手立て」の提案を受けて

提案：藤原和好さん

パネラー：成田信子さん（國學院大學）

松本吉弘さん（松坂市立松江小学校）

佐藤久美子さん（江戸川市立上一色小学校）

司会：中村龍一さん（都留文科大学・非）

☆第2日（8月12日）午前9時からです。実践報告があります。

・堀恵子さん（新潟県加茂西小学校）「おにたのぼうし」（あまんきみこ）

・近藤恵子さん（枚方市立樟葉小学校）「のはらうた」（工藤直子）

司会：牛山恵さん（都留文科大学）

佐藤学さんの出番は2日目の午後の全体シンポジウムです。13時から16時までの予定で、田中実さんとわたし（橋本）と佐藤学さんとの3人で、「文学の授業における〈物語〉と〈小説〉」というテーマでやります。実は今からこれが苦になっています。どういふ発表をしようか、かなり悩んでいます。

くわしい日程などは次の会報でお知らせします。

## これからの計画

### ☆ 6月16日（土）奈良例会

午後2時半～5時 奈良教育大学附属小学校  
一年生のことばの学習 提案・橋本博孝

### ☆ 6月23日（土）三重例会

午後2時半～5時 三重大教育学部4階国教ゼミ室  
草分京子さん 実践報告「海の命」

### ☆ 7月7日（土）三重例会

実践報告・中西祐司さん「やまなし」

### ☆ 7月21日（土）奈良例会

実践報告・入澤佳菜さん「平和のとりでをきずく」

### ★ 8月11日（土）12日（日）

日本文学教会国語教育部会夏期研究集会・三重大学

### ★ 8月25日（土）26日（日）語り合う文学教育の会合宿研究会（詳細未定）

### ★ 11月23日（金・祝日）24日（土）近畿東海サ連協合同研究集会

職場の知り合い、友だちに声をかけてたくさん集まりましょう。